
天使の奇跡 ~ 3つのセカイ ~

花澤文化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の奇跡〜3つのセカイ〜

【Nコード】

N7823P

【作者名】

花澤文化

【あらすじ】

僕の親友が殺された。それから2年。高校2年生となった僕は普通の日常を過ごしていた。ある一言まで。

「あなたが紺野裕香ですね。挑戦しますか？天使の奇跡に」

そこに現れたのは紛れもない天使だった。

天使と人間が織り成すSFファンタジー。

日常の謳歌

誰かが言った。

この世にはパラレルワールドというものがあると。

僕がその存在を信じているかというかと信じていない方の部類に入るだろう。でも、その考えは脆く崩れ去る。そうせざるをえなかった。

パラレルワールドの存在を信じたかった。

できることなら『もし』の世界に行きたかった。

『もし』だったら』。

そんな世界があるというのなら僕は探したただろう、どんな手を使っても。

雨が降っていた。

それはすごい勢いで地面にはちよつとした水の流れができるくらいだ。僕はただ立ち尽くしていた。

まわりでは大人たちが騒いでいる。でもそんな声も聞こえない。聞きたくないのもあるかもしれない。それを聞いてしまうと目の前の出来事を認めることになりそうだから……。地面を流れていたのは雨水だけじゃない。

赤い水。

血。赤、赫、紅、朱。そんな血が流れていた。

「おい、少年。そこで立ってないでそこをどきなさい！おい！救急車に乗せるのを手伝ってくれ！」

大人が僕を邪魔くさそうにしながら他の大人に助けを求めている。その大人は一般人じゃない。医者？救急隊員？なんで病院の関係者がここに？と思うほど僕の思考は止まっていた。

「……………」

「少年！好奇心で見てるんなら……少年？」

「……………」

「！……………」
知り合いだったのか……済まない。君も救急車に乗るかね？」

僕は静かに首を横に振る。それは否定の意味。なぜ僕に救急車に乗るよつ言ったのか。

その意味を考えたくなかったけれど考えてしまう。

その日。僕の親友が殺された。

○

春の日差しが気持ちいい午前中。

これからあまり好きではない（普通学生で好きなやつはごく少数しかないだろう）学校に行くわけだが気分は晴れている。

高校2年生の春。6月というもう春を惜しまなければならぬ時期。その登校中だ。

「おっはよう。ゆかゆか」

「おっす」

今、僕に話しかけてきたのはクラスメイトである内野……
まで。僕の記憶力よ。

この歳でもう活動を休止するな。そうそう内野明日香^{うちのあすか}。

普段名字だし名前忘れてもしょうがないと思う。

と言いつくす。

独りで。

もちろん女子でショートヘアの元気っ子。可愛い顔をしてるが朝からこのテンションはきつい。

「むう・・・素っ気ないなー。女の子が朝から話しかけてるというのにー」

「あいさつしたろ」

おっとそういえば伝え忘れてたことがあった。

僕の名前。

なんでこいつからゆかゆかと呼ばれているのか。

それは僕の名前が紺野裕香こんのゆかというからだ。

まあまあ。分かってる。

この名前は男のものじゃないくらい。でも両親からもらった名前が裕香なんだ。

「あ、そういえばさー知ってる？」

「ん？」

「ここらへんで昔殺人事件があったんだってさ」

「・・・」

「もうなんでも2年ぐらい前になるらしいけど・・・ってあれ？どつたの？」

「な、なんでもないぞ。元気元気！」

「答えになってない。元気がどうかなんて聞いてないんだから」

「すまんすまん」

「事件で思い出したけど、最近行方不明事件も多発してるよね」

「それは知ってる。うちの学校でも何人かいるんだろ？」

「うん、でねでね。行方不明だったのに帰ってきた人がいてー、話をきくと何も覚えてないっていうんだよー、これってあやしいよね？ね？」

ニュースで見たことがある。

行方不明記憶喪失事件。

それは日本全国で起こっていることらしいけれど数日で戻ってきて、そして何も覚えていない。たまたま 覚えているやつがいるがそいつはむしろ自分からいなくなったみたいな事を言うから大袈裟にならないらしい。

「もう学校だぞ」

「うん」

僕は気になっていた。行方不明記憶喪失の方もそうだけど殺人事件の方も。

まだ犯人は捕まっていない。

僕はそんな世の中で過ごしていた。

翌日までは。

「あなたが紺野裕香ですね。挑戦しますか？天使の奇跡に」

そのセリフで僕の日常は崩れ去った。

日常の謳歌（後書き）

初SF！

と言いましてもまだSFな感じはなく、主人公がオタクでヘタレだ
という部分も描かれていませんが・・・。

登校中で終わってしまったんで次こそは騒がせたいと思います。

でわ

第1星 僕は言つまた明日……と。

「というか大変だよなあ」

「何が？」

「いや、新しく始まった小説って主人公の紹介、そのまわりの紹介をしなきゃいけないだろう。それがどうにもわざとらしくなつてしまうからさ」

「それは小説家としてまだ初級。そしてそんなメタな発言はするな」

と今、教室で僕の話相手をしてくれているのが同じクラスの木曾きそ

直喜。なおき

ちゃんと律儀につつこんでくれるので話しやすい相手なのだ。ほらみる、なんだこの紹介。わざとらしい。

「それはいいが、裕香。お前学校でゲームをするな」

「ん？ああ、すまん。今、ユカちゃんを攻略中なんだ」

「同じ名前のヒロインを攻略……か」

「やめる。哀れんで欲しくて言つたんじゃない」

「でもそこらへんは平気なのか？」

「平気だな。僕が攻略しなくて誰がユカちゃんを攻略するんだ？」

「いや、そのセリフには言いたいことが多すぎて処理できないんだが……」

放課後。学校をおえて、僕たちは今雑談中だ。と言つても僕はゲームもしてるわけだが……。

「そついえばお前明日何の日分かるか？」

「ん？明日？んーと非法法ちゃんの放送日？」

「なんだそのアニメ。放送できるのか。同じくプリキュ〇でもないぞ」

「プリ〇ユアは日曜の朝だろうが！ぶつ飛ばすぞー！」

「しらねえし、しらねえよ、そんなことー！」

おつと僕としたことが……冷静に冷静に……。

「お前、黙ってればかつこいいのにな」

「それは僕にかつこよくないと言ってるようなもんだということを知れよ」

「そんな会話じゃなく、明日はうちのクラスメイトが帰ってくる日だろ？」

「ん？ああ、そうか」

行方不明。

行方不明になった人物は必ず5日おきぐらいに帰ってくる。ずれでも4日、6日おきだ。

しかし何があつたのかと聞いても、何もなし。自分から行方不明になったとしか言わず、ある人はそのまま、またある人は再度行方不明になる。

「うちのクラスのやつ・・・えーと・・・」

「裕香。クラスメイトの名前ぐらい覚えておけ。おきなみだろ。」

「沖波？そうかそうか。そんなやつだったな。2回目の行方不明だっけ？」

「そうだ。もう5日か・・・」

僕は知っていた。沖波。漢字はあつてるかわかんないけど、それは木曾の好きな人だったような気がする。本人は言っていないけど行動でばればれ。

「ま、帰ってきたときにはキスぐらいしてやれよ」

「なっ！できるわけねえだろ！」

「あれ？ゲームじゃよくあるぜ」

「お前のゲーム脳にはあきれるばかりだ。じゃ、俺は帰るぞ」

「おう、じゃあな」

これで僕1人。なぜ僕は帰らないか。それは内野を待ってるからだ。内野明日香。朝一緒に登校してきたやつな。

あいつあれでも学級委員長だから今日はその会議で遅いらしい。

先に帰っててもいいと言われたけれど帰っても用事などがあるわけでもなし。

そもそも家が近いというだけで行き帰りを共にする女子高校生の器に驚いた。

ほんとに。

まじで。

普通はあれだろ。そんなことしたら付き合っるとか変な噂が流れるから嫌うんじゃないのか？

「お、選択肢ミスったか？」

ゲームの話。選択肢で女の子（2次元）と付き合えるか決まる。

そんな世界だったなら。どれほど。どれほどつまらないことだろう。もちろん、自称引きこもりな僕（部屋からはでているが）は何度もアニメやゲームの世界に行きたいと思ったことはある。

でも・・・

それは駄目だ。

絶対につまらない。

ゴミ人生とでもいえる。

せつかく人は色々な選択肢があるのにそれを踏みにじるのと同じなのだ。

なぜ選択する選択肢は1つでなければならぬ。2つ、3つと選んでもいいだろうが。そして全部やる。

完璧に諦めずに。その欲張りで欲望まるだしな人間らしい生き方が好ましいのだろうか。

「変な能力与えられてもなあ・・・」

それで地球を救えとかあいつを助けるとか倒せとか。そんなのは実際大変だ。アニメを羨ましく思う時があるがそれは他人だからこそ楽しめるものもあるんだろう。

死ぬかもしれない恐怖にうちかつのは大変なことなんだ。そして人を救うなど・・・

「簡単にできるもんじゃない」

「何が？」

「おわっ！」

こんなベタなことをさせたのは内野明日香だった。誰かに話しかけられて驚くつて……。

なんか恥ずかしいことを考えてたので僕は誤魔化そうと適当に言葉を使った。

「キスをするこたさ」

なんかとんでもなくキモいやつになっていた。

「ふーん、そうなんだー」

しかしそんな言葉にも内野は気にした様子なかった。と思ったのは僕の気のせいなのだろうか。

あーなるほど分かった。普段の僕がもう気持ち悪いからか。納得。

納得はしたけれど受け入れるつもりはさらさらない。

「もし、さ。私がキスさせてあげるーって言ったらする？」

「ああ、するする。もうね、全国の優柔不断、ヘタレ主人公に言ってやりたいね。僕はここにいるぞと。もうその時点でルート決定さ。僕を舐めるな、そしてひれ伏せ」

「じゃあ、しよっか」

「すいませんでした！」

ドヘタレだった。僕が内野にひれ伏していた。というか土下座だった。

全国の優柔不断、ヘタレ主人公から逃げて、隠れたかった。僕はここにいませんよー。

「内野は冗談きついなー」

「むむむ……」

ん？なんか内野が可愛らしい。

いや、その可愛らしいことが異常みたいな言い方でとても失礼なのだけれどもしかして怒ってる？

「もう、ゆかゆかなんかしらないもん」

「語尾にもんとか僕を萌え殺すサキュバスかお前は」

失礼と言つか人を淫魔に例える最低人間の誕生。

僕もある意味淫魔だった。

「ゆかゆかなんか・・・ゆかゆかなんか・・・」

「え？なに？何を言われんの？」

「まつげが目にはいつちやえーーーーー！」

「妙に現実的！！逆に怖い！」

内野は走り去ってしまったようだ。どこを反省すべきなのか見当がつかない。

「僕も帰るかな」

内野の後を追うように僕も帰ることにした。

また明日仲直りできるだろと考えながら。土下座をすれば許してくれるのだろうかと土下座セールルまで考えていた。

また明日。

その言葉がここまで遠いとは思わなかったのだ。また明日。また明日・・・と。

第1星 僕は言つた明日・・・と。(後書き)

もたもたしてますね・・・。

まだSFチックなことはまだ出てきていませんが始めなので。

でわ

第2星 天使は奇跡と言った。

内野を怒らせたその帰り道。

1人で帰宅していると見かけたことのある人を見た。まだ若く20代前半という近所のお姉さん。

「歌さん。こんにちわ」

「あら、裕香じゃない」

歌さん。僕の家近所に住んでいる人で昔からずっと遊んでくれた優しい人だ。その分怖いけど……。

「今日は散歩ですか？」

「私はそんなに暇じゃないの。あなたのようにゲームばかりやっている時間はないわ」

「手厳しいですね」

「前にも言ったけどあなた、年齢が私の弟とかなり近いの。だから遠慮なんてしないわよ」

「なんて理不尽！」

弟さん。弟さんはもう亡くなってしまったらしい。

僕は会ったことがあるのかもしれないけれど覚えてはいなかった。もし生きてたらだいたい僕と同じ年ぐらいらしい。だいたいやらぐらいやらしいやらアウトすぎるとは思っけね。

「あれ？彼女さんは？」

「誰ですかそれは」

「明日香ちゃんに決まってるじゃない」

「ああ、内野ですか。彼女じゃないんですけど、今日は先に帰っちゃいました」

「薄情な奴ねえ」

「いや、僕じゃなくて内野が」

「明日香ちゃんが？よし、謝ってきなさい」

「なんで僕が悪いと判断する！？」

いや、あつてるんだけども！でも納得いかねえぞ！理由は！？根拠は！？

きつと理由も根拠もないだろうけれど一応聞いてみる。

「え？だいたい男が悪いでしょ？」

「なんて理不尽！」

この人には考えるということができないのだろうか。結果、僕が悪いのでそれ以上何も言えないのだけれども……。

「んじゃ、私はこれで」

「はい、ではまた明日」

そんな感じで僕は帰宅した。僕はここでもまた明日を使っていたのだ。

○

翌日。僕はいつも通りに起き、いつも通りに登校した。

ここまでは何も変化のない日常。日常を謳歌しているような絵に描いたような日常である。ここまでは……。

「おう、内野おはよう」

「ふん、知らないもん」

「もんとかふんとかお前は僕を萌え殺すために誕生した女子か何か！？」

人を自分の人生で縛りあげようする最低人間がそこにいた。

昨日もこんなやりとりをしたはず。

「昨日は悪かった」

「……………」

「僕もね、一晩考えたんだ。怒られた理由」

それも分かってないの？という目をされたがまあ、いい。続けよう。

「いや、ね。もしかしてなんだけど・・・」

「う、うん・・・」

「お前・・・」

「うん・・・」

「本当にサキユバスだったんだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あつたのは長い無言だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕も無言だった。

というかスベつたみたいなの空間になってしまった。

「ゆかゆかなんて・・・」

「え？またなんか現実的なことで傷つけられるの？」

「どっかいつちゃえー！」

「子供か、お前は！」

その瞬間だった。

「どっかとは他の世界でもいいということでしょうか？」

「!?!」

「!?!」

そこにいたのは白いワンピースを着た女の子。髪まで白く肌まで白い。

しかしその眼は金色だった。

いや、ここまでなら強いて100歩譲ってコスプレ人間だと思えるかもしれない。カラコンカラコン。カラーコンタクト。

でもそいつは・・・。

「浮かんでる・・・!?!」

「ゆかゆか・・・これどういうこと・・・?」

宙にいた。浮かんでいた。小さな白い羽を生やして。そしてそれはどうみても・・・。

「て・・・天使・・・?」

「ふむ。人間が私を認識できるとは驚きました。ふつうはパニック

を起こすものですが……。でも都合はいいですね。すぐに話題に入れる」

そのパニックを解く手段も色々考えていたんですけどね。と残念そうに言った後天使は地上に舞い降りた。

ふわりと。

ふわりとが似合う落ち方で。

「いかにも、私は『天使』です」

「何を言ってるの……?」

意味が分からない。

天使?何を言っているんだこいつは?

仮に天使だとしてもなぜ俺の前に降り立つ。ここには内野もいるのに、こいつは内野を見ていない。

確実に僕をみている。

視ている。

「一度ここで証明しなければなりませんね、私が天使だということ」

そういうと天使(仮)が僕に手をさしのばしてきた。

何をどうしてそういうふうになるのか分からなかったが僕はとりあえずその手を握ろうとした。

したところで僕は吹き飛ばされていた。

空に。

地面から5メートルの位置に。

「ゆかゆか!」

「な……。んだこれ……。?」

「これで信用してくれましたか?」

「ゆかゆかをどうするの?」

「私がどうこうするわけではないのです。決めるのは全てあなたですよ」

そう言って僕を見る。すると天使(仮かどうか揺らいできた)は僕をおろした。

地面にふわりと。

「あなたが紺野裕香ですね。挑戦しますか？天使の奇跡に」
天使の奇跡？

いや、まてまて僕はまだお前を天使だとは思っていない。

ここまで落ちついてるのは逆に脳が驚きがついてきてないことだというのはさすがに分かる。

けれども。

だけれど。

「くだらない」

僕はそう言い切った。

「どこの誰だかしらねえが、朝っぱらから御苦労だな。なんのイベントだ？なんでもいいけど僕はこれから学校がある。お前の悪ふざけには付き合ってられない」

「そうですか・・・やはり人間はこうでもしないと信じてくれないのですね」

と言った天使（仮）はおもむろに白いワンピースを脱ぎ始める。

「ちょっとあなた何やってるの!？」

「いえ、人間の男にはこれが一番だと・・・」

「ゆかゆかもう行こうよ、この人何かおかし・・・」

「ワタシテンシシンジル」

「単純!」

「信じてもらえましたか」

「違うよ!これたまたまゆかゆかが色仕掛けに弱いだけだから」

「行方不明記憶喪失事件」

天使はその事件の名前を口にした。

「・・・やっぱり人間なんじゃない。その事件を知ってるってことは少なくとも日本人ということだよ!ね、ゆかゆか」

「あ、ああ、そうだと」

「話聞いてた？」

「若干」

「若干？」

「若干聞いてなかった」

「・・・」

「その事件は日本中で騒ぎになっている事件です。しかし犯人はおるか証拠もなにも見つからない。それはなぜか、理由は簡単です。

それは天使の仕業だからです」

「なんで天使が人を行方不明にさせたり記憶喪失にさせたりしてるんだよ」

「行方不明については説明可能ですが、記憶喪失については説明不可能です。行方不明の期間だけの記憶がなくなるなんて都合がよいと思いませんか？」

「いや、だって・・・その時ある程度の恐怖を与えられたら・・・」

「それだけじゃ証拠になりません。それは【精神的証拠】というものです。あなたにはまだ【物的証拠】が足りない。その程度の推理力では2年前の犯人を捕まえることも難しいですよ」

「！」

「ん？2年前つてなに、ゆかゆか？」

「全ての謎を解き明かしたいのなら学校が終わった後に霧ヶ岬公園きりがみさきに来てください。ちなみに解き明かすのはあなた自身で私はあくまでサポートですが」

霧ヶ岬公園。

学校の近くの大きな公園だ。

「なぜお前が2年前について知っている」

「それは私が天使だからです」

「そう言い残し急に消えた。」

「ゆかゆか・・・？」

「ん、なんでもねえぜ！学校へ行こうか」

「え？・・・うん」

何も分らない。全てが謎だ。だがしかしこの時点で分かっていることは僕は壊滅的に作り笑顔が苦手ということだった。

第2星 天使は奇跡と言った。（後書き）

1日に2回更新。他のも更新しているので大分大変でした。

ちなみにタイトルの第〇星の星ですがこれは惑星の星をさします。

世界と言ってもいいでしょう。そんな感じですが。

アバウトです。

でわ

第3星 僕はただ『はい』と答えた。

授業後。

いや、正しくは学校を抜け出したただけなのだが僕は霧ヶ岬公園に来ていた。

もちろん自称天使を名乗る女の子に会いにきたわけなのだが・・・僕が来ることを予想していたのか、それとも朝から待っていたのかは分からないが公園のブランコに座っていた。

ここの公園は意外とでかく、遊具というよりも自由に遊べる大きい広場がうりだったりするわけだが・・・さすがに昼ちよい前。あまり人はいなかった。

いるのは親子連れの子供。

小学生前ぐらいの子ばかりだった。

「待っていました」

「・・・で、お前はこころへんに住んでいるやつなのか？」

殺人事件といい行方不明事件といいこころへん、または日本に住んでいないと分からないだろう。

どれも日本限定でおこっていることなのだ。

ただし、殺人事件は別だった。

殺人事件が話題になったのはこころへんに住んでいるところのみ。ニュースでもやっていただろうが、殺人事件なんてこの物騒な世の中かなりの量が報道される。

だから明確に覚えている人はこころに住んでいる人だけだった。

さらにその中から僕と殺人事件が絡んでいることを知っているのはかなり絞られる。

だが僕はこんなコスプレ女子を知らない。

では、誰なのか。

誰でもない。

天使らしい。

羽が生え、白いワンピースを着た。

天使らしい。

「お前、殺人事件の謎がどうのこうのって言ってたよな。あと行方不明についても」

「ええ、はい」

「お前は何を知っている」

「何も」

と区切り。

「私はサポートのみと言いました。私は何も知りません。解き明かすのはあなたです」

「じゃあ、僕は何をすればいいんだ」

「天使の奇跡に挑戦すればいいのです」
急に胡散臭くなる。

「あのなあ、僕だつてその手のことに憧れたこともある。いや現在進行形で憧れている。中2病だかなんだか知らないが授業中にクラスに悪者が来てそれを颯爽と僕が助けるといふ痛々しい妄想だつてする」

けれどという。

けれどと区切る。

「僕は信じていない。所詮妄想だとそう思うしかないんだよ、この世界ではな」

続けて僕は軽く慰めとはやくそのコスプレをやめるよう言った。

「次は2次元の世界に生まれ変われるといいな」

「この世界では・・・ですか」

天使（仮）もけれどと言う。

「ですが3つのセカイではどうでしょうね」

「3つのセカイ？なんだそれは？そういう設定なのか」

「あなたは気付きませんか。このような羽が生え、私も一応子供。

中学生ぐらいに見える私がなぜこの学校がある時間帯に堂々と公園に来れるんですか？」

いいえと続けて。

「公園に来れるまではいいです。しかしここにとどまっておくことなどできないですし、まわりは親子連れの子供ばかり。そんな中、このように常識から外れた私がなぜここにいれるのか」

確かに不思議だった。見た目が明らかにまだ義務教育中なのに警察もこなければ親だって気付かない。まして羽が生えているのだ。

普通ならおかしいと感じなんらかの行動をとるかあからさまに避けるはず。

しかし、周りは避けているのではなく気づいていないようなそぶりを見せる。

よくある僕以外には見えないという設定か？と軽く妄想に浸りつつ思うが朝、内野には見えていた。

なら……。

「簡単なことです」

と天使（仮）は息をすることと同じように答えを述べた。

「私の外面存在感と内面存在感を消しただけです。いわゆる、透明人間のようなものですよ。姿が消えてるわけではありませんが。もちろん近くに來られたら気付かれますが遠ければ気づきません」

朝のあなたの隣にいた人には見えてしまったようですね。と無表情で言う。

しかしこの天使（仮）は表情を変えない。

感情も変えない。

声も平坦だった。

顔は可愛いのに、なんて思うのは高校生の性だ。

「でも……だ」

と僕は笑う。

「お前のその言葉には【精神的証拠】も【物的証拠】もない。僕にはお前が消えて見えてないしな」

前にこいつに言われた言葉を代用してやったり顔をする。

「それを詳しく教えるにはあなたには『天使の奇跡』に挑戦しても

「らいませんと」

「それは僕の質問に答えられないと同義じゃないのか？」

「……」

勝ちを確信する。

論破！と叫びたいくらいだ。

僕のこの推理というよりへりくつに異議はあるまい。

しかしなぜだろうかこの虚しさは。

こんな虚しさは近所の小学生、舞ちゃんに算数で計算勝負をして思わずムキになり勝った瞬間高笑いをしてしまった時以来だ。

「では、あなたが『天使の奇跡』に挑戦しない限りは私の負けではないのでは？」

「ふっ……じゃあ、挑戦するさ。お前のその戯言がどれほど残念かきつと数年後に分かるだろうがその前に僕が教えてやる。中2病の先輩としてここでその妄想を砕く。仲良く天使の挑戦ごっこをして恥ずかしさに気付くがいい」

「はい、か、いいえ、でお答えください」

「……」

怒られた。

年下に怒られた。

「あなたは『天使の奇跡』に挑戦しますか？」

「はい」

その瞬間僕は無重力だと感じた。

体が浮く感じがする？

感覚がおかしい？

どれも違う。

だって気づいたら僕の目の前にあったのは……

「地球……だって……」

僕の目の前には1つの球体があった。

青く、鮮やかで、写真で見たことのある球体。

まぎれもなく地球だった。

それはまだいい。

よくはないが、僕が目の前になっている残り2つよりはマシな問題だ。

そう残り2つ。

「なんだ・・・この白い球体は・・・？」

地球の左右に白い球体があった。

大きさは地球と同じ。

そんなものがあつた。

「つてか僕、普通に息できてるし、圧でつぶれてもいない。なんだ

?ここは？」

「ようこそ」

後ろから女の子の声がした。

ここまで来る直前にも聞いた声。

感情がなく、無表情で。

痛々しかった。

そんなはずの声が。

「3つのセカイへ」

白い、白い女の子が。

(仮)の外れた天使がそこにはいた。

第3星 僕はただ『はい』と答えた。(後書き)

久々の更新です。

ようやく入口。ようやくスタートしました、この作品。

今後もどうぞよろしくおねがいます。

では。

1 周目 『when』 のセカイ 第4星 2年前6月21日。

「お前・・・その翼・・・。それにその輪・・・。」

そこにいたのは紛れもない天使だった。

羽は神々しく輝き、頭には光の輪があった。

それはもう美しいという言葉では表現できないもの。

「これで信じてもらえましたか？」

「いや・・・ていつかここはどこだよ。」

「あなたたちの言葉で表わすならば宇宙。」

確かによく写真やテレビで見る宇宙にそっくりの場所にいる。

しかし明らかに違うものがある。

白い球体だ。

「あの地球らしきものを挟みこむようにある白い球体はなんだ？」

「あれは『セカイ』です。それと真ん中にあるのは地球で合ってます。」

少女はただただ坦々と僕の質問に答えていた。

しかし僕は理解できない。

まだそこまで頭が追いついていない。

「詳しく説明しますと、真ん中が『地球』。右が『when』。左が『if』です。あとの説明は後でします。では行きましょうか」「行くつてどこにだよ・・・。」

「『when』のセカイに行きます。ちなみに『when』、『if』、『地球』の順番になります。その順番通りに移動してあなたの知りたいことを探しましょう。」

「僕の知りたいこと・・・？」

僕は考える。

僕が知りたいこと。

2年間も目をそむけてきたある事件。

僕の親友が死んだある事件の犯人が。

知りたい。

「これ以上の説明は実際に行ってみてからにしますが、今ならまだ戻れます。普通の日常に」

普通の日常。

僕がいままでいた日常。

そういや、内野に何も言わずにきちまったな・・・。

「どうしますか？この状況が信じられない。戻ると言うのなら戻れます。しかしこの奇跡は2度と起きません。人生に1度だけの奇跡です。後悔は許されても後悔を払しょくすることは許されませんよ。これから何が起こるか分からない。

それに僕が解決しなくてもいいような問題だ。

警察に。

大人に任せればいい。

けれどそれでいいのかと考えたことがある。

でも僕は逃げる自分を正当化する。

そして何も行動せずに終わるんだ。

まだこれが現実とは思えない。

夢かもしれない。

けれど僕は・・・。

「後戻りなんかするかよ。人生にはセーブもロードもない。リセットボタンだつて正常に機能するか分からない。だったらやらずに後悔よりやつて後悔だ」

「分かりました。あなたの覚悟受け取りました。では、さっそく行きましょうか」

と言うと天使はおもむろに僕の手を握ってきた。

やわらかくてすべすべしてるんだな・・・。

「いやいやいや、手をつなぐってそんな大胆な・・・」

その後僕は冗談を言えないほどのスピードで白い球体につっこんでいた。

正確には天使に連れられて。

天使ってどこに連れてってくれるんだっけ？
ああ、なるほど。

天国か。

僕の意識はなくなった。

○

実をいうと夢じゃないかとかかなり思っていた。

だから軽く覚悟を決め、まあ、そのうち起きるだろうぐらいな気持ちで奇跡に挑戦した。

しかしこれは夢じゃないと分かる。

かなりベタな方法で。

「痛い！」

「すみません。まさか人間があこのスピードについてこれないとは思わず」

白い球体に激突していた。

しかし白い球体といっても地球ほどの大きさがある。

だから僕は球体にぶつかったというよりも白い地面にぶつかったような気がした。

あたりを見回す。

空も白く、全部が白い。

しかしそれ以外は僕が今まで過ごしてきた地球と同じだった。

酸素もあるし。

「んで、ここはどこだ」

「先ほど説明したように『when』のセカイです。では説明させていただきます。ここは好きな時間に移動することができます。

『when』というのは名前だけでなく『〜の時』という意味そのものなのです」

と説明しだした。
いやいやと。

時間をいじってなんの意味があるのかと僕は言う。
殺人はもうすでに起きてしまっているのに。

「あなたの覚悟は親友様を殺した犯人を見つけることでいいのです
ね？」

「ああ」

「では犯人を捕まえたい。どうすればいいのか。分かりませんか」
分かったら苦労しない。

僕は警察を目指していたわけでもないし、普通の高校生だ。

「確かに普通の高校生です。ですがここはあなたの言う、普通の世
界ではないでしょう？」

「……？」

何が言いたいのだろうと思ったがようやく分かった。

犯人を見つけるのに最適な方法。

「殺人現場に僕がいればいいのか……！」

「その通りです。しかし現実同様、危ない真似はやめたほうがよ
しいかと。もちろん死はありますので」

「死……か……」

その言葉を出されるとさすがに怖気づく。

しかし天使は微笑を浮かべずに微笑をうかべたようなことを言っ
た。

「そのために私たちがいるのです」

「お前が？」

「はい。サポートは任せてください」

「なるほどね。まあそこらへんは後で考えるところ……」

一回区切る。

「私たちってなんだよ？まさかまだ他にもいるのか？」

「記憶喪失行方不明事件。覚えてますね。あれは天使の奇跡に挑戦
したものばかりがなっているんです。現にあなたは今、行方不明に

なっている」

「え？僕が現実の世界にいない間は僕の分身が現れるとかじゃないのか？」

「そんな便利なコピーロボットはいません」

「そこまで具体的には言つてない！」

「行方不明は分かった。けれども。」

「記憶喪失は？」

「あれは本人が嘘をついているんです。このことは他言無用です。他の人に言った場合、天使の奇跡に関する記憶は全部消え、挑戦は2度と不可能になります。だからたまーに本当の記憶喪失もいるんですよ。ですが、天使の奇跡に挑戦している人には言っても大丈夫です」

「それをどうやって見極めるんだよ・・・」

「賭けじゃねえかそんなもん。」

「では『when』のセカイ。最初はどの時間にしますか？」

「あー、じゃあそうだな・・・」

「僕はいつにしようかと考える。」

「ちなみに1つのセカイにいれる時間は3日間。そしてそれぞれのセカイを回る周。すなわち『when』、『if』、『地球』で1周だと考えて、できるのは5周まで。それ以上やると大変なことになりますので」

「大変なこと？」

「死にます」

「・・・」

「重くなった。」

「大丈夫です。その前に解決するか諦めるかすればいいのですよ」

「そうか・・・」

「『when』のセカイの時間を決めれるのは1度だけ。また1周しないと変えることは不可能です。それを分かったうえで決めください」

「えーとじゃあ・・・」

僕は長い説明の間、考えていた時間帯を言う。

「2年前の6月21日に・・・」

「タイムワープと言ってください」

「・・・」

「2年前の6月21日にタイムワープ！」

するとただの白い世界に色が付き。

鮮やかになり、人が生まれ、建物が生まれ。

そして僕達がいた場所は見覚えのある場所にいた。

「ここは・・・」

広い広場、それに遊具。

「霧ヶ岬公園・・・」

僕は知らない間に地球（仮）に降りたっていた。

1 周目『when』のセカイ 第4星 2年前6月21日。 (後書き)

説明だらけになってしまいましたがある程度進むまではご了承ください。
さい。

次の考えもちろん浮かんでおりますのでそのまま続きを書こうと思えます。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7823p/>

天使の奇跡～3つのセカイ～

2011年5月24日18時25分発行